

ドラえもん のび太の宇宙開拓史

工学部 2 回生 岡崎総一郎

工学部 2 回生 木村 祥彦

ドラえもん のび太の宇宙開拓史(レビューア-岡崎)

古めの劇場版にはどれも言えることだが、原作より時代性を感じる。マンガでは省略できる背景や色、小物が映像では詳しく描かれる必要があるためだろうか。原作は時間の流れや時事ネタを扱うエピソード以外は、時代を感じさせるのはテレビや新聞、会話などメディア程度のみであった。逆に言えばメディアさえ調整すればドラえもんが連載を始める 70 年から PC の普及する 90 年代後半までのあらゆる時代に溶け込む普遍性があった。一方、今作では空き地がいつもの空き地から高架横へと移動しており背景の煙突や袋詰めの資材などから 80 年代らしさが醸し出されていた。普及の観点からは廉価なマンガより高価な映画(及びビデオ)の方が一回性が強く、同時代に訴えかけるように演出していると考えられる。

演出としてはコーヤコーヤ星の色合いが鮮やかになっていた。特に 2 色の月たちによって夜ごとに空の色が異なるのは試みとしては面白かった。しかし、キャラクターの性格付けには大いに疑問が残る。ギラーミンは無口で凄みのあるプランナー兼ヒットマンから、ペラペラとよくしゃべるヒットマンになってしまった。殺し屋よりむしろ鉄砲玉に思われる。ドラえもんが登場する悪役の中では数少ない職業悪人だったのが貧乏くさい探偵のように変わってしまったのは極めて残念だ。また、チャミーは、台詞がカタカナと漢字のみのエイリアンっぽさが強い原作と比べて、よく言えば人間らしさ、悪く言えば俗っぽさが増していた。鮮明とは言い難い当時の映像との相性を鑑みればアリだろうか。

ドラえもん のび太の新・宇宙開拓史(レビューア-木村)

映像技術的には大きく進歩しており、アニメ絵と CG の使い分けや親和性は抜群である。特にガルトイト鉱石を使って空に浮かぶシーンの美しさは一見の価値がある。

一方で、アニメ絵の作画は少々不安定なところがあり、新魔界大冒険などに見られる線が太め、かつ太さが不均一な絵と線の太さが均一な普段のアニメに近い絵が混在しており、キャラクターのデザインにも差があるため若干の違和感を覚えることもある。

新キャラモリーナさんの存在だが、彼女の存在以外はかなり原作に忠実なストーリー展開のため物語中盤まではかなり影が薄い。クライマックスでの父親との再開も、のび太が一度会っていたという伏線は張られていたものの唐突かつ無理矢理な感じがあり、正直なところ彼女の存在意義は薄いと感じた。

新旧比較

モリーナの追加は大長編新ドラで顕著だった「家族愛」の現れだろう。さて、「ドラえもん のび太の宇宙開拓史」のレビューは2人による共同執筆であるが、筆者らの間では「モリーナは不要だったのでは」という認識がある。彼女の行動について分析を行いたい。彼女が新宇宙開拓史でしたことは、1 父親を見殺しにされる、父親を発見する2 のび太ドラえもんをギラーミンに売る、その懺悔の2 つである。それぞれの要素について旧宇宙開拓史と比較してみよう。

1 について。ロップルの父親の死因は言及されておらず、その隙間にモリーナの父親が入り込んだかたちになっている。この映画で追加されたもっとも大きい要素である。宇宙航行中に父親を見捨てられたことが幼いモリーナのトラウマとなり、周囲の人間への憎悪を生む直接の原因となり、間接的にはギラーミンの口車に乗る理由にもなっている。「のび太の宇宙開拓史」というタイトルから考えれば、死亡した筈の父親が未開の星で自活しているのは「モリーナ父の宇宙開拓史」とでも言えよう。旧宇宙開拓史では地球人とコーヤコーヤ星人の交流が本筋だったため日常からの逸脱と回帰を描くに留まったが、新宇宙開拓史ではそこにモリーナ父を加えることで新たな日常が生まれた、つまりキャラクター達の世界が広がったことを示唆している。コーヤコーヤ星人との離別の悲しみだけではなく、新世界への希望の喜びも感じさせる構造になったのは評価できる。

2 について。旧宇宙開拓史ではカモラン家の息子(以下カモラン息子)が、お気に入りのクレムを尾けている際にガルタイト一味に捕まり地球人の出自を白状していた。彼はのび太とドラえもんの活躍を聞く場面では嫉妬に燃え、ジャイアンスネ夫静香が追ってきた場面では懺悔し、見せ場の全くないつくづく不憫な男である。不憫な彼は新宇宙開拓史ではモブの一人となっており益々のこと不憫である。不憫なカモラン息子の数少ない見せ場を奪ったモリーナもまた見せ場らしい見せ場は最後だけだ。

そもそも原作「ドラえもん のび太の宇宙開拓史」で地球人とロップル・クレム・ガルタイト一味以外が物語に関わっている描写はカモラン息子しかない。その中に家族愛を描くために追加されたモリーナが割り込める余地はほとんどなかったのだ。従って父娘のシーン追加、カモラン息子との交代があったと推察されるが、全体を通して観た時に最序盤、終盤のみであり重要な登場人物という感覚は非常に薄かった。父娘の間に再び芽生える家族愛を伝えようとする試みは、新ドラえもんらしく、大山ドラえもんからの脱却の光だったのだが、イマイチ上手に機能していなかったように感じる。